

4. 保育者の言葉がけが幼児の遊び行動に及ぼす影響について

岩崎 裕香 (教育学部 学校教育教員養成課程 保健体育コース 4年)

指導教員

大久保 英哲 (教育学研究科 保健体育専攻 教授)

1. 研究目的

心身の発育・発達著しい幼児期において、「遊び」はとても重要な役割を持つ。なぜなら、運動遊びを通して身体を動かす楽しさを知ったり、運動能力を発展させ、また集団遊びを通して友人関係を築き上げたり、ルールを守る・工夫するといった社会性や創造性などの内面的な能力を身に付けることが出来るからである。

しかし、近年は遊び環境の変化や少子化、幼児の特性の変化に伴い、体力低下、主体的な遊びの減少、一人遊びの増加など、幼児は多くの問題を抱えている。これらの問題を解決するために、また遊びを充実させ、幼児の心身の発育・発達を促進させるために、保育者の様々な働きかけはとても重要な役割を果たすものである。保育者の幼児に対する働きかけは数多く存在するが、その中でも保育者の幼児に対する言葉がけは幼児の気持ちに大きな影響を与えることが出来、気持ちの変化によって主体的な遊びが促進されたり、遊びの中での運動量を増加させたりすることにつながるのではないかと考えられる。

そこで、本研究では保育者の言葉がけによる援助に着目し、運動遊びと集団遊びの二つの要素を取り入れた「鬼ごっこ」の場において、従来から幼児の運動量を知るための測定に多く用いられている万歩計による運動量の測定と、岡澤¹⁾によって標準化された「幼児の運動遊び場面での有能感テスト」を参考に作成した「鬼ごっこ用有能感・受容感テスト」による幼児の有能感、受容感の測定を実施した。そして、保育者の言葉がけに伴うその変化を比較・検討することで、幼児の遊び行動を充実させるためには、保育者のどのような言葉がけが必要とされているのか明らかにしていきたい。

2. 研究方法

1) 対象及び各場面測定件数

金沢大学附属幼稚園年長児 26名(男児 13名、女児 13名)、及びその担任保育者 1名を対象にし、測定した。対象児は実験内容に最も適した人数を考え、2つにグループ分けした。

2) 測定時期及び時間

4日間にわたり測定を行い、一回の鬼ごっこは3分間とした。

3) 保育者の言葉がけ

◆保育者の言葉がけカテゴリーとその使用例

保育者の言葉がけは、プレテストにおける分析結果と、山崎²⁾らが作成した言語的応答の分析結果を照らし合わせ、9つにカテゴリー化した。(表1参照)

表1 保育者の言葉がけの分析カテゴリーとその使用例

No	カテゴリー	定義・使用例
意図的方法を用いた言葉がけ（保育者の枠組みで子どもの行動をより望ましい方向に方向づけるもの）		
①	励まし	子どもの気持ちを安心させたり、奮起させたりするための言葉がけ 「大丈夫」「頑張れ」
②	指示的リード	子どもに何らかの行動をさせるための直接的なリード 「走れ」「追いつけ」
③	非指示的リード	子どもに何らかの行動をさせるための間接的な誘いかけ 「もう少し頑張ってみない?」「疲れてる人をねらってみたら?」
④	状況の説明	現象の記述、事実を客観的に述べたもの 「タッチされたよ」「(本人に向かって) ○○ちゃんが鬼だよ」
⑤	情報の伝達	周囲（他児）の様子や、先の見通しの言及 「あっちに余裕な人がいたよ」「後ろから鬼が来ているよ」
受容的方法を用いた言葉がけ（その子どもの感情や行動を尊重し、共感し、子どもの枠組みの内側から子どもの成長を援助していくもの）		
⑥	繰り返し	幼児の言葉の繰り返し 幼児の「疲れた」に対して「疲れたね」
⑦	代弁	子どもが実際に言葉にしていない気持ちや感情を明確化 「それで悔しかったんね」「タッチ出来なくて、残念だったんね」
⑧	相手への注目	相槌、感嘆、賞賛等、認めていることを示すもの 「おー、すごい、すごい」「そっかー」
⑨	発問	子どもの行動や気持ちを明確化するための問いかけ 「今タッチしたの?」「まだ痛い?」

◆保育者の言葉がけ場面設定

<場面Ⅰ. 言葉がけ無し>

<場面Ⅱ. 全体に向けた抽象的な言葉がけ>

抽象的な言葉(ex.頑張れ、走れ等)を使い、幼児の名前を呼ばず全体に向けた言葉がけ。

<場面Ⅲ. 個人に向けた抽象的な言葉がけ>

抽象的な言葉を使い、幼児の名前を呼んで個人に向けた言葉がけ。

<場面Ⅳ. 個人に向けた具体的な言葉がけ>

具体的な言葉(ex.手を伸ばして頑張れ)を使い、幼児の名前を呼んで個人に向けた言葉がけ。

4) 測定項目及び方法

◆保育者の言葉がけ

◆幼児の遊び行動

①運動量の測定及び解析

万歩計を用いて、鬼ごっこ時における歩数の測定を行った。また、得られた結果から、t検定を用いて平均値(Mean)と標準偏差(SD)を求め、場面間の有意差の有無を調べた。

②鬼ごっこに対する有能感、先生に対する受容感の測定

岡澤が作成した「幼稚園の運動遊び場面における有能感テスト」を参考に、鬼ごっこ用有能感・受容感テストを作成し、鬼ごっこ終了直後に全ての幼児を対象に実施した。回答形式は、有能感あるいは受容感の高い回答順に、4点、3点、2点、1点と得点化された。

また、得られた結果から、t検定によって平均値(Mean)と標準偏差(SD)を求め、場面間の有意差の有無を調べた。

3. 研究成果と考察

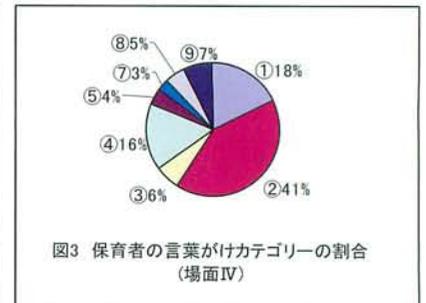
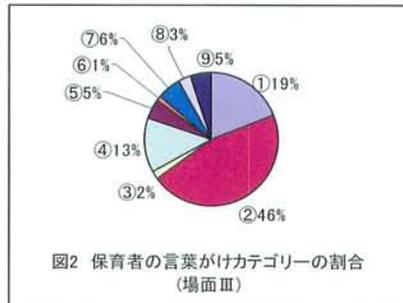
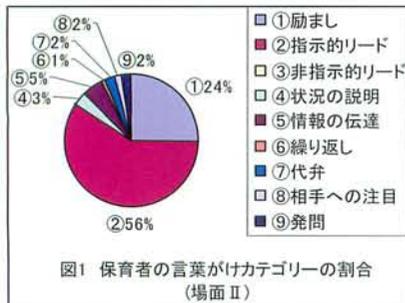
◆保育者の言葉がけカテゴリーの割合

図1～3より、各場面で言葉がけの条件は違うものの、共通して①励ましと②指示的リードで全体の50%以上を占めていることが分かる。また、場面Ⅱから場面Ⅲ、場面Ⅳへの移行に伴い、徐々に③非指示的リードや④状況の説明、⑧相手への注目、⑨発問の割合が増加していることも見て取れる。

これらのことから、以下のようなことが推察される。まず、保育者の中には常に幼児に対する暖かい思いや、してほしい行動が明確に存在しており、このことが鬼ごっこ時においてほとんど絶え間なく①や②の言葉がけを行うことにつながり、全場面でこれらのカテゴリーが50%以上を占める結果に結びついたのでないだろうか。さらに、ビデオ撮影や自然観察の結果から、①や②の言葉がけを腕振りなどの動作も加えながら気持ちを込めて頻繁に行うことによって、幼児の心によりいっそう保育者の言葉がけが響き、鬼ごっこの雰囲気をよくしたり、遊び内容を充実させることにつながると考えられる。

また、幼児全体にしてほしい行動を伝える場合は、③を用いて疑問形で間接的に指示を行うよりも、②を用いて命令形で直接指示を出す方が効果的である。しかし、保育者が一方的に直接指示を出すばかりでは、幼児の自ら考える力や主体的に遊びに関わる態度の成長を阻害する恐れがあると考えられる。そこで個人への言葉がけでは、③や④を用いて、直接指示を出すのではなく、してほしい行動に導くためにヒントを与えたり、間接的に誘いかけたりして、幼児の気持ちを尊重し、考える機会を与えることが大切である。今回、実験に協力していただいた保育者は、Ⅱ場面からⅢ場面、Ⅳ場面への移行、つまり全体から個人に対する言葉がけへの移行に伴って、③や④の割合が増加しており、上述したことがしっかりと行われていたことが分かる。また、受容的方法を用いた言葉がけについても、鬼ごっこのような多くの幼児がそれぞれ激しく動き回る状況下で、全体に対して行うこと

は難しいが、特に子どもの受容感を育てるために重要であると言われている。保育者は、全体に対して受容的方法を用いた言葉がけが十分に出来ない分、個人への言葉がけでは、全体を見渡し、それぞれの幼児の行動をしっかりと観察し、⑦や⑧を用いながら幼児一人ひとりに合った受容的な言葉がけを行い、幼児をしっかりと受けとめていた。



◆歩数による運動量測定

予想では、保育者の言葉がけが場面Ⅰから場面Ⅳへ移行するに伴い、幼児の平均歩数値は増加するというものであったが、結果は予想に反したものとなった。表2より場面Ⅰと場面Ⅲの間、場面Ⅲと場面Ⅳの間で有意差が生じていることが分かる。この要因をビデオ撮影等の結果から予想すると、まず、場面Ⅲより場面Ⅰの方が、有意に平均歩数値が高かったという結果に対しては、一つ目の要因として実施日の関係が考えられるであろう。そして、二つ目には測定前の幼児の活動状況の関係が挙げられる。

また、場面Ⅲより場面Ⅳの方が、有意に平均歩数値が高かったという結果に対しても、一つ目に実施日の関係が挙げられるであろう。場面Ⅲと場面Ⅳの実験実施日の間は1日空いたため、鬼ごっこに対する幼児の飽きが緩和され、このことが平均歩数値を上げる結果につながったのではないだろうか。二つ目も、上述したものと同じことが挙げられる。しかし、例えば場面Ⅲでは鬼の幼児に対して「捕まえろ」という抽象的な言葉がけが場面Ⅳで「あそこで休んでいる人たちを捕まえろ」という具体的な言葉がけに変化したことによって、幼児の中で目標が明確になり、勢いよく走り出す姿を観察出来たり、場面Ⅳで「○○君なら速い人でも捕まえられるよ」という受容的な言がけを受けたことによって、さらにやる気を出し、タッチ出来るまで力いっぱい走り回っている幼児の姿などがいくつか観察することが出来た。

表2 各場面の平均歩数値及び標準偏差

(n=19) 場面Ⅰ		場面Ⅱ		場面Ⅲ		場面Ⅳ	
Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
501.1	102.8 *	478.0	109.5	418.9	83.6	465.3	71.1 *

* vs.場面Ⅲ (p<0.05)

◆鬼ごっこに対する有能感

表3より、各場面の1~4項目どれを見ても、平均点は3点以上であり、鬼ごっこに対す

る有能感が比較的高い幼児が多いことが分かる。しかし、t検定によって有意差が認められたのは、項目3の場面Ⅱと場面Ⅳの間のみであった。

得られた有意差の要因として考えられるのは、本測定に協力していただいたクラスの幼児は何度も鬼ごっこをしたことがあったため、保育者の言葉がけの有無に関係なく鬼ごっこが成り立ち、楽しむことが出来ることが多いということである。また、二つ目として、Benenson&Dweek⁴⁾が述べている幼児期は有能感を高く認知する傾向があるという幼児期の運動有能感の特徴による影響を述べる事が出来るであろう。

しかし、例えば場面Ⅳにおいて、「○○ちゃん、後ろから鬼が来てるよ」という保育者の言葉がけによって、鬼から上手に逃げる事が出来たり、「○○くん、あっちで休んでいる子を捕まえておいで」というがけによって鬼を交代する事が出来た幼児の有能感項目点数の変化を見たとき、場面Ⅰよりも高まるという結果を得ることが出来た。

表3 各場面における項目得点の平均と標準偏差

	場面Ⅰ		場面Ⅱ		場面Ⅲ		場面Ⅳ	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
1. 鬼ごっこが楽しかったか	3.8	0.7	3.5	1.1	3.5	1.0	3.8	0.4
2. 全力で走ることが出来たか	3.6	0.7	3.5	0.9	3.5	0.8	3.4	0.8
3. 鬼から上手に逃げる事が出来たか	3.1	0.9	3.6	0.5	3.2	1.0	3.1	0.9*
4. 鬼になった時、上手に捕まえる事が出来たか※	3.7	0.6	3.3	0.9	3.5	0.9	3.5	0.8
鬼ごっこに対する有能感因子	14.2	2.4	13.8	2.3	13.5	2.3	13.8	1.8

※項目4については、回答対象児が鬼になった幼児のみに限定されるため、未回答であった幼児の得点は、回答幼児から得られた平均値を代入した。 * vs.場面Ⅱ (p<0.05)

** vs.場面Ⅲ (p<0.05)

◆先生に対する受容感因子

表4より、有意差が認められたのは項目6の場面Ⅰと場面Ⅱの間、場面Ⅱと場面Ⅳの間、項目7の場面Ⅲと場面Ⅳの間であることが分かる。場面Ⅱの項目6の平均点が大きく低下している要因についてビデオ撮影や自然観察の結果から明らかにしようと試みたが、明らかにすることは出来なかった。

予想通りの結果が得られた有意差について、場面Ⅳにおいて保育者から積極的に名前を呼んで言葉がけを受けていた幼児の受容感が他の場面と比べて大きく高まっているという結果を得ることが出来た。このことから、名前を呼んで言葉がけを行うことは、「先生は自分に言っているんだ」と言葉がけされた幼児が感じやすく、全体への言葉がけの時よりも耳を傾け、しっかりと聞こうという姿勢になり、保育者の言葉がけが幼児の心に伝わりやすいということが考えられる。

今回のテストより、予想通りの結果はいくつか得ることが出来たが、受容感全体ではt検定より有意差を得ることが出来なかった。この理由として、ビデオ撮影や自然観察をもとに予想すると、鬼ごっこのような多くの幼児が騒ぎながら激しく動き回る状況下では、

保育者の言葉がけがしっかりと伝わりにくい時もあることや、言葉がけを受けた時は先生に対する受容感を感じていたとしても、何分か経つと受容感が薄まってしまう場合があること、そして今回テストをして明らかとなったテスト方法に関する問題点などが挙げられるのではないだろうか。

表4 各場面における項目得点の平均と標準偏差

	場面Ⅰ		場面Ⅱ		場面Ⅲ		場面Ⅳ	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
5. 先生も一緒に鬼ごっこをしていると感じたか	2.2	1.1	2.1	1.3	2.3	1.4	2.5	1.4
6. 先生が自分を応援してくれていると感じたか	2.7	1.2*	1.8	1.2	2.3	1.2	2.7	1.2*
7. 先生の声かけのおかげで頑張れたと思うか	2.6	1.1	2.7	1.2	2.2	1.2*	2.9	1.3**
先生に対する受容感因子	7.6	2.9	6.6	3.4	6.7	3.4	8.2	3.6

* vs.場面Ⅱ (p<0.05)

** vs.場面Ⅲ (p<0.05)

4. 結論

・場面ⅠからⅣへの移行に伴い、幼児全体の運動量や有能感、受容感得点の平均値は、有意に高まるという予想とは異なる結果となった。

・しかし、幼児一人ひとりを見た場合、保育者の言葉がけが幼児の気持ちや表情、行動に影響を与えている場面が多々見受けられ、このことから幼児の心身の発育・発達において保育者の言葉がけは重要な役割を果たしていると考えられる。

・また、言葉がけの内容や状況によって、声の大きさやトーン、表情や目線の高さなどを変えることが必要であり、このことが保育者の言葉がけを幼児の心にしっかりと伝える大きな要素であると言える。

5. 参考文献

- 1) 岡澤哲子 (1996) 「幼稚園の運動場面における有能感テストの作成」
スポーツ教育学研究 16 (1) pp.63-72
- 2) 山崎晃・樟本千里 (2002) 「子どもに対する言語的応答を観点とした保育者の専門性」
保育学研究第40巻第2号 pp.90-96
- 3) 杉村伸一郎・桐山雅子 (1991) 「子どもの特性に応じた保育指導—Personal ATI Theory 実証的研究—」教育心理学研究(39) pp.31-39
- 4) Benenson, J.F. & Dweck, C.S (1989)
「The development of trait explanations and self-evaluations in the academic and social domains」 Child Development (57) pp.79-87
- 5) 阿部直美 (2006) 「保育者の言葉がけにみる子どもの主体性の育みについての考察」
大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要 pp.89-94